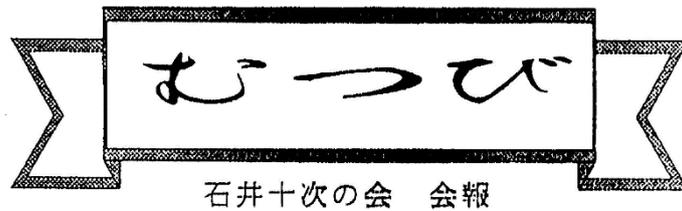


2022年
(令和4年)
12月13日



303号

「人は人によって磨かれ、志ありてこそ縁はつながる」

石井十次 柿原政一郎 尾崎一男 岩永高德

高鍋町長 黒木敏之

「町立高鍋図書館」を再生し、名称を「柿原政一郎記念・高鍋図書館」へと変更しました。高鍋町の図書館の設立は、昭和30年に、柿原政一郎が、明倫堂書庫と秋月左都夫の書庫を移築し、書庫の横に図書館を建て高鍋町に寄贈したことから始まっています。柿原政一郎の図書館設立に託した想いは、藩校明倫堂に残された古文書の散逸防止と高鍋町の文教の気風（高鍋から優れた人材が育つこと）を守るためでした。現在の建物は、昭和53年に建て替えられたものですが、年月を経て、老朽化した個所も多く、本年、改築を進め、名称を変更し、創設者・柿原政一郎の志を受け継ぐ、古文書の蔵書数の多い、小さいながらも質の高い図書館を目指しました。

高鍋図書館の設立者・柿原政一郎は、衆議院議員を経て宮崎市長、宮崎県議会議員、高鍋町長へと、中央から地方へと軸足を移したユニークな政治家であり、また、日向土地株式会社、高鍋製糸株式会社、広島臨港土地株式会社、中国民報社（現在の山陽新聞）、四国民報社、九州輸出製茶株式会社（現在の九茶で当時は日向茶を全国ブランドに育て中国に輸出）などの社長や高鍋商工会議所会頭を歴任し手腕を発揮した経済人で、さらに、大阪スラム街青少年の保育教育、大原社会問題研究所の設立運営、茶臼原孤児院の支援などで活躍された社会事業家でもありました。しかも、それらはすべて請われて引き受けた仕事であり、新約聖書の「与うるは受くるより幸福なり」という教えと、論語の「儀をみてせざるは勇なきなり」を規範とし、一切「名利」を求めず「無報酬」を貫き「奉仕の人」に徹していました。

政一郎は、明治16年に高鍋町に生まれ、幼少より学力優秀で、高鍋中学から岡山の第六高等学校へ進学します。岡山への進学は母方の親戚になる石井十次を頼ってのことでした。六高時代は十次の薫陶を受けて哲学をまなび、岡山孤児院の仕事を手伝っています。さらに東京帝国大学哲学科に学び、十次の勧めにより倉敷紡績会社に入社し、十次の理解者で孤児救済事業の支援者であった大原孫三郎の秘書を務めた後、政治や社会事業や会社経営にと次々に取り組み、大きく成長し羽ばたいていきます。

柿原政一郎の人間性を垣間見るエピソードがあります。

昭和20年10月、政一郎は、終戦直後の戦災孤児救済のため、すでに解散していた茶臼原孤児院（大正3年の十次の没後、時を経て、大正15年に大原孫三郎が解散を議決）を、十次

の孫・児嶋琥一郎を擁立し、新たに財団法人石井記念友愛社を設立し再出発をさせています。これはまさに師と仰いだ石井十次に報いた恩返しであったと考えます。

「徳は孤ならず必ず隣あり」

「人は人によって磨かれ、志ありてこそ縁はつながる」

柿原政一郎を師と仰いだ人がいます。高鍋信用金庫を中興の祖として県内最優良銀行として育て上げた故・尾崎一男元高鍋信用金庫理事長です。昭和 26 年に政一郎が高鍋町長に就任した際、前職を辞してまで、政一郎に学ぶため助役職を自ら進んで引き受けておられます。私は、尾崎さんから「柿原さんの下で多くのことを学んだ」と何度もお聞きしたことがあります。

後に、尾崎さんは高鍋信用金庫理事長として活躍されます。小さな町の信用金庫を、全国の事例になるほどの信用金庫へと発展成長させ、高鍋町内企業は勿論のこと宮崎県内外の企業の育成と共に、県民の生活の豊かさの実現に取り組み、県内各所に多くの支店を設け見事な実績を残されました。

また、尾崎さんは、柿原政一郎の意志を汲み、ライフワークとして、石井十次の顕彰活動に情熱を注がれました。社会福祉法人石井記念友愛社の理事として永年に渡って友愛社の運営を支えると共に、昭和 57 年に、石井十次の偉業を顕彰し、人類愛の精神を広めるため、石井十次顕彰会を設立されました。石井十次生誕祭、石井十次顕彰の集い等の行事開催と共に、児童福祉に貢献された方を表彰する「石井十次賞」を制定し、十次の功績を全国に広める活動に取り組みされました。

ある夜、突然、尾崎さんから自宅に「友愛社の監事を引き受けて欲しい」という電話がありました。まだ若く戸惑う私に、「尾崎さんからの要請はお断りできないよ」という父の一言で監事をお引き受けした経緯がありました。友愛社の監事をお引き受けして以来、私は、尾崎さんから、石井十次や柿原政一郎のことなど様々な貴重なお話をお聞かせいただく機会に恵まれました。今振り返れば、学び多い珠玉の時を賜っていたのだと感慨深いものがあります。

友愛社の監事は 2 名制で、もう一人の前任監事が高鍋町教育長などを歴任された岩永高德先生でした。それが岩永先生との貴重な出会いでした。岩永先生は優れた教育者にして高潔な奉仕の人であり石井十次の精神を教育の場に広められた方です。多くのことを学ばせていただきました。既に、お二人とも鬼籍に入られましたが、私を石井十次に導いた恩人であり、未だ感謝に堪えない存在です。

20 年以上前のエピソードですが、尾崎さんと岩永先生が「石井十次を中学校の教科書に載せる」「東京の教科書出版社へ要請に行く」と言い出して、二人して東京へ陳情に行かれたことがありました。私は「なんと無謀な」「できるはずがない」「無理だ」と思っていたのですが、翌年、中学校の教科書の歴史コラムに石井十次が掲載され紹介されたのでした。

当時、岩永先生は 70 歳代後半で、尾崎さんは既に 80 歳代、お二人とも行動力と情熱に満ちた凄い人たちでした。時過ぎてなお忘れえぬ大切な人たちです。

志は朽ちず、今もなお石井十次は中学校の教科書に掲載され続けています。

おぎきかずお
尾崎一男 (その1)

—石井十次を支えた先人たち (7) —

尾崎一男は零細な高鍋信用金庫を全国有数の預金量を誇る信用金庫に育てた名経営者として知られる。大正2年生まれの尾崎は石井十次と面識はなかった。高鍋町長・柿原政一郎のもとで助役を務めたとき柿原の薫陶を受け、柿原を尊敬するようになった。柿原の石井十次に対する尊崇の念に強い影響を受けた。柿原なきあと石井記念友愛社を支え、石井十次の顕彰に尽力した。



尾崎 一男

1. 高鍋で家業の公衆浴場を経営、鋸屑を大八車で運ぶ

昭和6年に旧制高鍋中学を卒業し法政大学経済学部に入學。招集されて、熊本に駐屯し終戦を迎えた。大阪で就職したが妻の体調不良で高鍋に帰り家業の公衆浴場を手伝う。風呂の燃料は鋸屑だった。尾崎は毎朝早く製材所に出かけ、大八車に山盛り鋸屑を積んで帰った。大学出の若者が麦わら帽子をかぶり地下足袋をはいて大八車を挽く姿は評判になった。高鍋信用組合長の久保田鶴次は尾崎に、信用組合の専務に来ないかと言った。「鋸屑を運ぶ者がいない」と断ると、「人を雇え。それくらい給料を出す」といわれた。尾崎ははじめて金融業界に入った。

2. 柿原町長から助役に招請される

昭和26年1月、高鍋町長に当選した柿原から、突然助役を引き受けるよう要請された。柿原は旧制高鍋中学卒業生を助役に据えたいと思い同窓生に人選を頼んだ。同窓生が推薦したのが尾崎である。尾崎にとって晴天の霹靂だった。彼は組合長の久保田に相談した。久保田は「断って来る」と言っただけで柿原町長のところに行ったが、逆に説得されて帰ってきた。「尾崎君、4年間役場に行ってみて。4年経ったらまた帰って来い」と言っただけで。尾崎の人生はこれを機に変わる。37歳だった。

3. 柿原の下で町政を担い、多くを学ぶ

町長になった柿原は給料を受け取らなかった。「給料をもらおうと税金が高くなる」というのが理由だった。町政はすべて助役の尾崎にまかせた。尾崎にとっては慣れない町政だったが、躊躇することなく自分の判断で進めた。税金問題で議会で質問が出たとき、柿原は「私が最も信頼する尾崎助役がやっているのだから心配ご無用」と答弁した。尾崎としても奮い立たざるを得なかった。

4. 黒谷坂の難工事で柿原の恩情に救われる

町の消防長を兼務していた尾崎は、消防団員の制服を調達したいと考えた。団員には制服がなかった。団員の士気の高揚のためにも揃いの団服が必要と考えていた。そのころ町は黒谷坂の道路改修工事を予算化した。尾崎は工事を高鍋町消防団500名に請負わせ、その賃金で制服を調達しようと考えた。延べ1000人の作業員が必要という見積りだったが、団員は素人なので4回ずつ出る計画で工事に着手した。しかし始めると相当な難工事だった。地盤が粘土のため思ったより手間がかかり、予定の期日に完成できない。団員は家業や勤めがあり何日も休めない。そのうえ共産党員が現場に来て「新田原に通じる軍用道路建設反対」のアジ演説をして団員のやる気を削いだ。尾崎は部長会を招集し協議の結果、工事中止が決まる。ところが警察署長から「共産党が高鍋の消防団を壊滅させたと全国に情報が流れている。消防団の士気にかかわる。工事を続けられないか」と強硬な抗議を受けた。尾崎は「これは大変な事態になった。町民からも批判を受け、議会でも問題化するだろう」と覚悟した。町長には相談せず尾崎の一存で進めてきた工事だ。尾崎は早朝に柿原町長をたずね、叱責を覚悟で報告した。柿原は頷きながら聞いたが、思いがけない言葉を口にした。「それは尾崎君、高鍋の消防団だからそこまで出来たのだ。大変だったね。よくやったね。このままでは団員に気の毒だから残りは専門業者にやらせ、あくまで消防団の手で完成したことにしてやれ。そこまで始末してやれ」と言っただけで。厳しい叱責を覚悟していた尾崎は、柿原の恩情あふれる言葉に感激した。尾崎は後に「この人のためなら命はいらない。どんなことがあってもこの人のために働こう。人生の師と仰いで行こう、という気持ちになった」と書き残している。(続)



現在の黒谷坂交差点
(正面奥が黒谷坂)

(参考：尾崎一男著「郷土に生きる」)(編集委員 石川正樹)

編集委員だより

今年から「むつび」編集委員に仲間入りさせていただき、「むつび」の意味（親しい、親しむなど）

や300号を越える歴史（「友愛会だより」の名称で1997年から）に深さと重さを感じます。現在は、編集会議で、石川正樹委員の著書「石井十次を支えた先人たち」の発刊に向けて原稿推敲や構成検討をしていますが、石井十次の功績はもちろん、支える多くの人々に感銘をうけます。

さて、「石井十次資料館」に募金箱が置いてあります。

「友愛社を支える会（石井十次の会の名称は2007年から）」ができた1997年頃に設置されたと思われます。友愛社で育つ子どもたちの健やかな成長を支えるために現在にまで受け継がれているのではないのでしょうか。この思いを多くの会員の皆さまと今後も共感していける

ように「むつび」発行に努めたいと思います。一年間、ご愛読いただきありがとうございました。来る新しい年が皆様にとって良い年となることを編集委員一同祈念しております。

文責： 西村 さと子



《 お し ら せ 》

★新会員のご紹介（敬称略）

【宮崎市】藤山 さとみ

★ご寄付をいただきました（敬称略）

【宮崎市】岩切 杏子 大澤 哲之 【高原町】岡元 有子 【高鍋町】大塚 忠興

【愛知県】井元 霧彦 【大阪府】永岡 正己

*ここまでの掲載者は編集等の都合により11月20日までのものとしています。

★1月号の通信発送作業は 友愛社でおこないます。

★今月号からゆうあい通信は更紙よりも安価な再生紙（白）を使用しています。むつびも1月号からかわります。

この会報は、宮崎県を中心に全国1700余の個人・団体に毎月送付しています。

〒884-0102宮崎県児湯郡木城町大字椎木644-1
社会福祉法人 石井記念友愛社後援会

石井十次の会

TEL/FAX 0983-32-4612

メール yuuaisya-jyuujinokai@ki.jo.jp

編集後記

★「むつび」巻頭に、公務ご多用にもかかわらず高鍋町長 黒木敏之様より玉稿をいただきありがとうございました。

（編集委員 西村 さと子）